

## ボードレールと二月革命後の社会主義 ——詩篇「驕慢の罰」の思想的射程——

佐々木 稔

### 序

19世紀フランスの代表的な詩人の1人であるシャルル・ボードレールが生前に刊行した詩集は、『悪の華』1冊だけであった。この詩集が初めて世に出たのは1857年のことであり、この年はフランス史の区分で言えばナポレオン3世が統治する第二帝政期にあたる。だが、ボードレールの詩集出版の計画は、実際には12年ほど前の1845年にまで遡る。この年は、ボードレールが自らの詩を発表し、美術批評を出版した初めての年であった。このことはつまり、詩人あるいは批評家としてデビューした時点で、既に1冊の詩集を編むことができる程度には詩のストックがあったことを示唆するものである。それにも拘わらず、出版が実現するまでに10年以上もかかったのは何故であろうか。その理由として、詩集の構成の問題や、一通り書き上がった詩にも手を入れ続ける詩人の完璧主義の問題などが挙げられるが、何よりもボードレールの問題意識の変遷がその主要因を成しているように思われる。これを示すのが、2度にわたる詩集の表題の変更である。

詩集の出版者となったプーレ＝マラシに宛てた書簡の中で、ボードレールは「私は謎めいたタイトルか、爆竹みたいなタイトルが好きなのです」<sup>1</sup>と吐露している。「悪の華」という表題は、表面的に見るならばそれほど謎めいたものでも爆竹めいた大胆なものでもないように思われるが、この最終的なタイトルに到るまでに、ボードレールが考えていた2つのタイトルは、それぞれ謎と爆竹に相応しいものと言える。ボードレールが最初に考えていた詩集のタイトルは「レズビアン」というもので、1845年から47年の間に考えられていたものである。この表題は、現代の私たちには明らかに女性の同性愛を思わせるが、当時はそうした意味合いはそれほど浸透しておらず、単純に「レスボス島の女たち」という語意が想起されたに過ぎない。だ

<sup>1</sup> « J'aime les titres mystérieux ou les titres pétards. », à Poulet-Malassis, 7 mars 1857, *CPI* I, p. 378.

以下の論述では、略号 *OC* は、Baudelaire, *Œuvres complètes*, Claude Pichois (éd.), 2 tomes, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975-1976 を、また、略号 *CPI* は Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois avec la collaboration de Jean Ziegler, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2 tomes, 1973 を表すことにする。また邦訳については、『ボードレール全集』（全6巻）、阿部良雄（訳）、筑摩書房、1983-1993年を参照した。また、特に断りの無い限り、本文中の引用において、傍点は原文でのイタリック、山括弧〈〉は大文字、亀甲括弧〔〕は引用者による補足を表す。

が、一般的でなかったとはいえ、いわば知る人ぞ知るというニュアンスでサッフォー的用法は既に存在していた。ボードレールが当時書いていた詩篇からして、いわゆるレズビアン的な語義を含ませていたのは明らかであり、この意味で、七月王政末期のボードレールが恋愛あるいは社会通念に関わる不道徳を主題とする詩集、すなわち「爆竹」のような効果を生む詩集を構想していたことは間違いない。ただし、「悪の華」というタイトルに含まれる「悪」がきわめて多義的な意味合いを持ち得るのに比べて、「レズビアン」という語がかなり狭い意味に限られてしまうという問題がある。したがって、このタイトルはボードレールが書いていた多様な性格の諸詩篇を包含し得るものではなく、遅かれ早かれ棄却される運命にあったと考えてよい。

「レズビアン」に続いて、ボードレールは詩集のタイトルとして「冥府」というものを考える。この語が詩集の表題として初めて現れるのは1848年10月であり、資料上最後に確認されるのは1852年の春である。「冥府」は、元々キリスト教の用語であり、その意味は大きく2つに大別される。1つは、洗礼を受ける前に死んだ子供たちの魂が還る場所。次に、キリストよりも前に死んだ人々が送られる場所である。彼らは神の御心に適う義人であるが、キリストによる贖罪に与っていないために天国に入ることができない。このため、彼らがキリストの到来を待つためにあてがわれたのが冥府であった。こうした本来の神学的意味から比喩的な用法が派生し、一時的な滞留の場所や中間的な段階、さらには陰鬱な雰囲気や状態を表すのにこの語が用いられる。

ボードレールがなぜこの「冥府」という語を詩集のタイトルとして選んだのか、断定的に述べるのは難しいが、この語が1848年の革命からその挫折に至る政治騒擾の直後に現れ、ルイ・ボナパルトによるクーデタによる共和政崩壊に伴って姿を消したという事情と無関係ではあるまい。1848年は、二月革命におけるわずかながらのユートピア的理念の実現が、保守派ブルジョワの反動政策によって徐々に失望へと転じ、さらには六月暴動という血塗れの惨劇によって決定的な階級分断と社会的な憎悪という帰結をもたらすことになった年である。ボードレールの世代は、1848年に先立つ七月王政期にロマン主義文学の洗礼を受けて育った世代であり、第二共和政下の一連の混乱は彼らの精神に深い刻印を残すこととなった。本稿の課題は、この第二共和政期に発表された最初の詩篇である「驕慢の罰」をその時代的文脈に置き直すことで、二月革命後におけるボードレールの思想的課題を浮き彫りにすることである。

## 1. 1850年における「驕慢の罰」

幻となった詩集『冥府』の名と共に初めて人々の目に触れた詩篇、それが「驕慢の罰」*« Châtiment de l'orgueil »*である。この詩篇は、『悪の華』では初版、第2版ともに16番目に位置するものであり、「地獄のドン・ジュアン」の直後に配置されていることが注目される。実際、従来の研究ではこの直前の詩篇と併せて解説されることが多く、自らの力を誇示する人

間の傲慢と、それによってもたらされる悲劇的結末という両詩篇に共通した筋書きは、道徳的な含意を読者に読み取らせる働きをする。やや俯瞰的に言えば、『悪の華』の冒頭において、この「驕慢の罰」までの16詩篇は、栄光と悲惨とを享受する詩人像を提出するものであると言ってよい<sup>2</sup>。だが、以上のことはこの詩篇を『悪の華』に置き直したときに読み取られる解釈であって、『冥府』中の1篇としてこれを解釈しようとする私たちには、『悪の華』の構造から引き出された意味合いを無反省に適用することは許されない。端的に言って、「芸術詩群」から抽出される『悪の華』の詩人観は、ロマン主義的な英雄的詩人観から、ゴーチエやバンヴィルが体现するような異教的、形式主義的な芸術観までも許容する幅広いものであって、「現代青年の動揺と憂鬱」<sup>3</sup>という『冥府』の主題に即して考えるならば、少なくともこれよりは狭い枠組みに限定して捉えられなければならないであろう。とりわけ、『冥府』期のボードレールは感情を排し、形式的な美に徹した異教的芸術観を批判する立場をとっていたのであってみれば、『悪の華』において「驕慢の罰」と接続する詩篇「美」との連繫を安易に想定することはできない。そこで、改めて『冥府』の主題に引き付けた解釈を試みようとするならば、この詩の発想源に立ち戻ることが有用であるだろう。

#### 驕慢の罰<sup>4</sup>

〈神学〉が、このうえもなく精気漲り澆漓と  
 華やいでいた、あの驚異に満ちた時代のこと、  
 伝えによれば、ある日、世にも偉大な博士の一人が、  
 信仰薄き人々の心の琴線に触れ、  
 その暗い奥底までを揺り動かし、  
 あまつさえ、純粋な聖霊のみの通い来た、  
 天なる栄光へ向かう道を見出すも、  
 それは自らも知らぬ尋常ならざる道、  
 その挙句、余りの高みに登った男のように恐慌を来し、  
 魔王の如き驕慢に我を忘れて叫んだという。  
 「イエスよ、小さなイエスよ、汝をひどい高みにまで運んでやったぞ！  
 だが、儂が汝の甲冑の間隙を衝こうと思えば、  
 汝の恥辱はその栄光にも匹敵するものとなり、

2 『悪の華』第1章「憂愁と理想」冒頭の構成については、『全集1』p. 465に大まかな説明がある。やや詳細な考察については、James Lawler, « Sur un parfait ensemble » (in *Lecture de Baudelaire, Les Fleurs du Mal*, Steve Murphy (dir.), Presses Universitaires de Rennes, 2002, p. 35-43) を参照。

3 « les agitations et les mélancolies de la jeunesse moderne », *OC I*, p. 792-793.

4 *Le Magasin des familles*, juin 1850, p. 335-336 ; *OC I*, p. 20-21, 870.

汝はもはやつまらぬ物と成りおおせよう！」

その刹那、彼の理性は消え失せた。  
 この太陽の輝きは薄紗<sup>うすぎぬ</sup>をかけたようにかき曇った。  
 かつては生き生きとした神殿、秩序と豪華に満たされて、  
 その天井の下であれほどの華々しさを誇っていた、  
 この知性の中に、ありとあらゆる混沌が渦巻いた。  
 鍵の失われた地下室のように、  
 沈黙と夜が彼のうちに巢食うようになった。  
 それからというもの、彼は往來の獣のようになり、  
 何ものも見ず、野原を  
 うろうろ、夏も冬も区別がつかず、  
 使い古された物のように、汚らしく、役に立たず、醜くて、  
 子供たちの楽しみと笑いの種となっていた。

この詩篇の研究に決定的な一歩を画したのは、アルベール＝マリー・シュミットの論考「ボードレールの知られざる典拠について」である<sup>5</sup>。シュミットが明らかにしたのは、この詩篇の発想源が、13世紀の神学者シモン・ド・トゥールネーの逸話だということである。シュミット以来の考証も踏まえて要約的に述べるならば、13世紀のセント・オールバンズ修道院の僧マチウ・パリスの『大年代記』に、トゥールネーにまつわる話が収められており、また同時代のトマ・ド・カンタンプレの逸話集にも同じ話が書き留められているという。これらラテン語の著述は近代に入ってからもしばしば取り上げられており、例えば18世紀には、カジミール・ウーダンの『古代キリスト教作家注釈』や、『百科全書』中の「スコラ哲学者」というデイドロの記事にトゥールネーへの言及があり、さらに19世紀には、ミシュレが『フランス史』でこの神学者を取り上げている<sup>6</sup>。これらの情報から、ボードレール以前、既に何人もの学者たちがこの逸話を取り上げていたことがわかる。

だが今日のボードレール研究では、1848年10月15日の『両世界評論』誌に掲載された、サン＝ルネ・タイヤンディエの論文「ドイツ無神論とフランス社会主義」（以下、「タイヤンディエ論文」）<sup>7</sup>が、ボードレールの詩の発想源になったというのが定説である<sup>8</sup>。タイヤンディエの

<sup>5</sup> Albert-Marie Schmidt, « Sur une source inconnue de Baudelaire », *Nouvelle Revue française*, 1<sup>er</sup> avril, 1937.

<sup>6</sup> 松村剛、「『驕慢の罰』補注」、『仏語仏文学研究』、第4号、東京大学仏語仏文学研究会、1990年、p. 55-61.

<sup>7</sup> Saint-René Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français — M. Charles Grün et M. Proudhon », *Revue des deux Mondes*, Nouvelle série, t. 24, oct-déc. 1848, p. 280-322.

<sup>8</sup> 「驕慢の罰」の発想源として、タイヤンディエ論文を最初に指摘したのはピーター・S・ハンブリーであると思われる。ハンブリーは、「ボードレールの「功德」および「驕慢の罰」2篇についての注釈」(Peter S.

論文は、ドイツの新ヘーゲル派哲学者カール・グリューンの著作『フランスおよびベルギーにおける社会運動』<sup>9</sup>、およびフランスの社会主義者プルードンの著作『経済的諸矛盾の体系、あるいは貧困の哲学』(以下、『貧困の哲学』)<sup>10</sup>の書評をしつつ、それによってプルードン批判を行うことがその眼目となっている。まず強調しておくべき点は、ボードレールがこの論文を下敷きにしたことから、「驕慢の罰」が1848年10月から1850年の春頃の間にかかれたと推定されるということである。したがって、この詩篇は1850年当時、ボードレールの最も新しい作品のうちの1つであり、この時期のボードレールの問題意識を最も鮮明に反映するものであり得たはずである。とりわけ、この時期のボードレールはプルードンに強い共鳴を覚え、実際に接近してもいたことから、タイヤンディエの論文は、ボードレールが文学と社会理論との関係についてのどのような思想を抱いていたかを考えるための手がかりとなる<sup>11</sup>。

「タイヤンディエ論文」は全体として5つの部分に分かれている。序論を成す導入部で、1848年に至るフランスの社会主義思想の概観を行った後、第1章でドイツのヘーゲル主義の無神論者カール・グリューン思想について言及し、第2章では、『貧困の哲学』を中心としたプルードン思想に対する批判が展開される。第3章ではドイツの青年ヘーゲル学派の思想とプルードンの思想との相違点が整理され、結論にあたる第4章では、義務および自由の感情、家庭の健全さ、同胞への愛といった諸道徳によって、社会主義思想は容易に打ち負かされるとする結論が述べられる。この論説は具体的には以下のように展開される。

まず冒頭で、二月革命以来のフランスにおいて、社会主義者たちの影響力が強まりつつあることを慨嘆し、彼らの思想を「災いを招くユートピア」<sup>12</sup>と呼ぶ。タイヤンディエは、フランス社会主義の淵源を18世紀の啓蒙思想に求め、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーらの影響は否定できないとしながら、社会主義の濫觴となったバブーフに結びつくのは、ドルバック、エルヴェシウス、レイナル神父らであると述べる。そして、彼らの思想がフーリエ、サン＝シモン、ルイ・ブラン、ルルー、カベラによって練り上げられ、プルードンの『貧困の哲

Hambly, « Note sur deux poèmes de Baudelaire : “Réversibilité” and “Châtiment de l’orgueil” », *Revue d’Histoire littéraire de France*, n° 3, 1971, p. 485-488) において、「シュミットの注解に即して考えれば、ボードレールは第二共和政下において、都市の無益な闘争から離れ、〈永遠〉の問題にしか関心を示さなくなったということになるが、このような結論は首肯されないだろう」として、シュミットの論考に疑義を呈し、タイヤンディエの論文をその根拠として提示した。

<sup>9</sup> Karl Grün, *Die soziale Bewegung in Frankreich und Belgien*, Darmstadt, C. W. Leske, 1845. なお、フランス語での作者名とタイトルは、Charles Grün, *Le Mouvement social en France et en Belgique* であり、タイヤンディエの論文ではフランス語表記が用いられている。

<sup>10</sup> Pierre-Joseph Proudhon, *Système des Contradictions Économiques ou Philosophie de la Misère*, Paris, Guillaumin, 1846.

<sup>11</sup> ハンブリーによるタイヤンディエ論文の発見以降のもので重要なものは、以下の2篇である。Jean-Paul Avic, « La Théologie usée de Baudelaire », *L’année Baudelaire* n° 7, Paris, Champion, 2003, p. 81-90 ; Jérôme Thélot, « Châtiment de l’orgueil », *Baudelaire. Violence et poésie*, Gallimard, 1993, p. 337-363.

<sup>12</sup> « toutes les utopies désastreuses », St.-R. Taillandier, « L’athéisme allemand et le socialisme français », 1848, p. 281.

学』において最高度の表現に達したとする思想史的な確認作業を行う。しかしながら、「ブルードン氏は18世紀的な唯物論者の考え方とは全く異なっている」<sup>13</sup>とする。ブルードンに影響を与えたのはカール・グリューンを経由したドイツ無神論であり、その先端的な立場である新ヘーゲル主義の原理を「人類の神格化」として定義する。

神であろうと人類であろうと、人間は自らの外にある何ものかに従属してはならない。要するに一言でいえば、個人の持つ権利の他にいかなる権利もあり得ない。人間ハオノズカラ神ナリ。これこそ青年ヘーゲル学派の最も進んだ教説である。<sup>14</sup>

タイヤンディエによる当時のドイツ哲学の要約は、ボードレールにかなりの印象を残したようである。このことは、後に『人工天国』の第4章が「人＝神」と題され、さらにその章の末尾で、現代ドイツの諸教理の「驕慢」に触れていることから明らかである<sup>15</sup>。

タイヤンディエによれば、ブルードンはこうした当代ドイツ哲学の「反キリスト教信仰」に与することはなかったものの、人間の神格化という教理についてはこれを共有していたという。そして、ブルードン思想に固有の特徴として、彼の<sup>アンチノミー</sup>二律背反的思考を指摘する<sup>16</sup>。タイヤンディエはこの思考法について、「この論理は、人類における秩序を創造するはずのものであったが、ブルードン氏の精神を解決不能の混沌に陥れるという結果をもたらしたただけであった」<sup>17</sup>と言う<sup>18</sup>。こうしたブルードンの二律背反的思想における最も根源的な対立は、神と人間とのそれである。

ブルードン氏は最も壮大にして根本的な二律背反へと向かう。一方に神があり、もう一方には人間がある。神は無限であり、人間は限定された存在である。神と人間とは、相容れ

<sup>13</sup> « M. Proudhon ne relève en aucune façon du matérialisme du XVIII<sup>e</sup> siècle. », St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », 1848, p. 283.

<sup>14</sup> « l'homme ne doit pas se soumettre à quelque chose d'extérieur à lui-même, divinité ou humanité peu importe, et qu'enfin, pour tout dire, il n'y a d'autres droits que les droits de l'individu ; *homo sibi Deus*. C'est là la doctrine la plus *avancée* de la jeune école hégélienne, [...] », St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 300-301.

<sup>15</sup> R. バートンは、ドイツの哲学理論とボードレールとの関係性が、その1840年代後半の著述、とりわけ「反逆」の諸詩篇にはっきりと見ることができると述べている (Richard D. E. Burton, *Baudelaire and the second republic, Writing and Revolution*, Clarendon Press, Oxford, 1991, p. 280-281).

<sup>16</sup> St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 302.

<sup>17</sup> « Cette logique, qui devait *créer l'ordre dans l'humanité*, n'a réussi qu'à faire de l'esprit de M. Proudhon un chaos inextricable », St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 313.

<sup>18</sup> バートンは、この一節が「驕慢の罰」の「あらゆる混沌がこの知性に渦巻いた」という詩行に影響を与えたと見ているが、この一節は問題となる神学者トゥールネーの逸話と近い箇所でもあり、その可能性は高い (R. Burton, *Baudelaire and the second republic*, p. 281-282)。

ることのない二つの対立項である。<sup>19</sup>

こうした根本的な対立的性格ゆえに、「神の善、神の自由、神の知」は、「人間の善、人間の自由、人間の知」と真っ向から対立する。そして、この宇宙は神と人間の対立の場、どちらかが滅びるまで続く争いの場として規定される。だが、神は無限かつ完全であり、時間や現世の法に入りこむことはないので進歩することはない。これに対して、人間は有限かつ不完全であるため、常に前を向いて進歩する。このため、ついには先見の明のある有限者たる人間が、茫然とした無限者たる神に勝利する<sup>20</sup>。「彼 [= プルードン] はこう断言する。神は予見する力を持たない、神における摂理とは理解できない矛盾であると。そして、彼は神が人類の悲惨を予見しなかったことを非難する」<sup>21</sup>。そして、タイヤンディエは『貧困の哲学』における、あの有名な一節に到達する。

神、それは愚昧であり卑劣である。神、それは偽善であり欺瞞である。神、それは専制であり、悲惨である。神、それは悪である。<sup>22</sup>

こうして『貧困の哲学』を中心とした、プルードン哲学のあらましが示された後、第2章末尾において、シモン・ド・トゥールナーの逸話が引用される。これが、ボードレールが「驕慢の罰」の発想源とすることになる一節である。

矛盾に身を売ったこの論理学者、すなわちその精力的な言葉を語るために、獣性に身を売った論理学者について、彼がその著書の梗概<sup>レジメ</sup>で自らをどのように判断しているかが今やおわかりになるのではないだろうか？ 彼の「ワレ記念碑ヲ打チ建テタリ」に耳を傾けて頂きたい。「ニュートンの発見がいかに途方もないものであるかを説明するために、彼は人間の無明の深淵を明らかにしたと語られてきた。本書にニュートン的なものは何も無いし、経済に関する科学において、後世が宇宙に関する科学でこの偉人に帰したのと同じほどの貢献をしたと主張できるものは何もない。だが、敢えて言おう。ここにはかつて

<sup>19</sup> « M. Proudhon est amené à la grande et fondamentale antinomie : Dieu d'un côté, l'homme de l'autre. Dieu est infini ; l'homme est un être limité ; Dieu et l'homme sont deux contraires inconciliables. », St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 309.

<sup>20</sup> St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 309-310.

<sup>21</sup> « Il affirme que Dieu est incapable de prévoir, que la providence en Dieu est une contradiction inintelligible, et il reproche à Dieu de ne pas avoir prévu les misères du genre humain, il s'empporte contre ce qu'il appelle « la misanthropie de l'être infini. », St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 313.

<sup>22</sup> « Car Dieu, c'est sottise et lâcheté ; Dieu, c'est hypocrisie et mensonge ; Dieu, c'est tyrannie et misère ; Dieu, c'est le mal. », *Système des contradictions économiques, ou philosophie de la misère*, Paris, Guillaumin, 1846, t. 1, p. 416 [cité par St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 314.]

ニュートンが解き明かした以上のものがあると。天の深みといえども、驚異的な体系がその只中で動く、我らの知性に並ぶものではない。[…] これ以上何があるだろう？ 言ってみれば、天地創造の現場をとって押さえたのだ！」13世紀のこと、スコラ哲学を講じていた諸大学において、シモン・ド・トゥールネーと呼ばれた強力な弁証法学者がいた。ある日のこと、彼はキリストの聖性を見事に証明し、聴衆の心を奪い、こう叫んだ。「おお、ちっぽけなイエス！ ちっぽけなイエスよ！ 私がその気になれば、お前の法を称揚してやったのと同じほど、これを貶めてやることだってできるのだ。」諸々の年代記が敬虔な畏れを交えて宣べ伝えるところによると、件の詭弁家はたちまち理性を奪われたそうである。かつては諸大学を統べていたこの男、自らの論理に酔い痴れたこの弁証法学者は、やがてでたらめの片言を話すことしかできなくなり、子供たちの笑いものになったということだ。<sup>23</sup>

こうして、プルドン哲学の概要を記述し、その論理的粗雑さを指摘し終えたうえで、タイヤンディエは、キリスト教信仰、財産、家族といった伝統的価値観を称揚しさえすれば、社会主義は挫折を喫することになるだろうと述べて論考を閉じる<sup>24</sup>。

## 2. ユートピア思想への批判

「驕慢の罰」が「タイヤンディエ論文」を発想源としているということは、第二共和政成立前後における哲学や社会主義をめぐる論争の流れを汲んでいることを示すものである。理性を失う神学者の物語は、単なる題材以上の働きをしていると考えるべきであろう。とりわけ、『家庭画報』2篇に付された註釈が、詩を「現代青年の動揺と憂鬱」に関連づけて読むように

<sup>23</sup> « Maintenant, ce logicien livré aux contradictions, c'est-à-dire, pour parler sa langue énergique, livré aux bêtes, savez-vous comment il se juge lui-même dans le résumé de son livre ? Écoutez son *exegi monumentum* : « On a dit de Newton, pour exprimer l'immensité de ses découvertes, qu'il avait révélé l'abîme de l'ignorance humaine. Il n'y a point ici de Newton, et nul ne peut revendiquer dans la science économique une part égale à celle que la postérité assigne à ce grand homme dans la science de l'univers ; mais j'ose dire qu'il y a ici plus que ce qu'a jamais deviné Newton. La profondeur des cieux n'égale pas la profondeur de notre intelligence au sein de laquelle se meuvent de merveilleux systèmes... Que dirai-je plus ? C'est la création même, prise, pour ainsi dire, sur le fait ! » Il y avait au XIII<sup>e</sup> siècle, dans les grandes écoles de la scolastique, un vigoureux dialecticien nommé Simon de Tournay. Un jour qu'il avait admirablement établi la divinité du Christ et ravi l'auditoire, il s'écria : « Ô petit Jésus ! petit Jésus ! (*Jesule ! Jesule !*) autant j'ai exalté ta loi, autant je pourrais la rabaïsser, si je voulais. » Les chroniques rapportent avec un pieux effroi que le sophiste fut incontinent privé de sa raison. Cet homme qui régnait dans les écoles, ce dialecticien enivré de sa logique, ne sut bientôt plus que balbutier au hasard et devint la risée des enfans. », St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 314-315.

<sup>24</sup> St.-R. Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », p. 321-322.



促している以上、当時の思想的文脈を軽視することはできない。そこで、スコラ学者トゥールネーの逸話を引き写すことによって、ボードレールが何を表現しようとしたのかという問題が浮上してくる。ごく単純に考えれば、「タイヤンディエ論文」の文脈を引き継ぐことで、ブルードン批判のニュアンスをそこに込めたということになる。だが、この解釈をそのまま受け入れるのは難しい。というのも、この時期のボードレールは、ブルードンの思想に強い関心を示し、さらにこれに傾倒していたからである。

実際、「タイヤンディエ論文」が発表された5日後に、『アンドル県の代表者』という地方新聞に掲載された記事は、この時期のボーレールの問題意識を些かなりとも鮮明に反映するものである。「現下の状況」<sup>25</sup>と題されたこの記事は、無署名ながらその文体や内容からしてボードレールのものである可能性が高い。この記事の特徴は、二月革命を「人類の歴史の中でただ一度だけ」<sup>26</sup>実現した瞬間として、きわめて肯定的に受け取っている点にあるが、二月革命に対するこうした態度は、実は第二共和政期のボードレールに一貫したものである。だが、二月革命を有産階級や無産階級の労働者、王党派、共和派など、あらゆる階級、あらゆる立場の人々が「友愛的で神秘的な統一の中に飛びこんだ」<sup>27</sup>理想的瞬間として称揚しつつ、その後のブルジョワとプロレタリアの断絶と階級間の憎悪、その帰結としての六月事件を非難する。この事件の発端となった労働者たちの蜂起について、記事は「蜂起は正当なものであった、殺人と同じように」<sup>28</sup>と評価する。さらに、「権力は、反動派と呼ばれる人々によって奪い去られたわけではない」<sup>29</sup>と述べ、なんと民衆を武力鎮圧し、権力を握った「反動派」の責任さえも不問に付すのである。では、血の惨劇の責を負うべき者は誰か。「扇動者たち」である。

彼ら [= 民衆] を破滅させたのは、凡庸な指導者たちに他ならない。[…]

あなた方は手にいっぱい、何にでも効く万能薬を持ってやって来た。貧困に対する万能薬はありますか？ もちろん。無学に対する万能薬は？ きっと。では、悪徳に対する万能薬は？ …… […] 彼らは奈落へ向かっていった、民衆を道連れにして。<sup>30</sup>

<sup>25</sup> « Actuellement », *Le Représentant de l'Indre*, n° 1, 20 octobre 1848, OC II, p. 1060-1063.

<sup>26</sup> « une fois, une seule fois peut-être, dans l'histoire de l'humanité », OC II, p. 1061.

<sup>27</sup> « [...] toutes les classes politiques et religieuses, ouvriers prolétaires, ouvriers propriétaires, anciens partisans même de l'opposition légitimiste, républicains traditionnels et de vieille date, se précipitèrent avec enthousiasme dans une fraternelle et mystique union, — union que l'on crut définitive. Nous nous faisons gloire d'avoir partagé cette sublime illusion. », OC II, p. 1060.

<sup>28</sup> « L'insurrection était légitime, comme l'assassinat. », OC II, p. 1062.

<sup>29</sup> « le pouvoir n'a pas été enlevé par le parti des hommes qu'on appelle réactionnaire », OC II, p. 1062.

<sup>30</sup> « Ce sont les meneurs vulgaires qui ose l'ont perdu. [...] Vous êtes arrivés, les mains pleines de panacées universelles ; panacées contre la misère ? assurément ; — contre la non-instruction ? probablement, — et contre le vice ? ... [...] Ils ont marché à l'abîme, et le peuple avec eux. », OC II, p. 1062.

この一節で、記事の筆者は具体的な思想家や党派をはっきりと名指してはいるわけではないが、R. バートンはこれを1840年代の空想的思想家たち<sup>ユトビスト</sup>として、その枠内に入り得るものを「フーリエ主義者、ブランキー派、イカリア人<sup>31</sup>、サン＝シモン主義者らについては疑いなく、さらに彼らほど急進的でない空想的思想家たち」だと推定する。こうして、バートンはボードレールの手になるとされる「現下の状況」を中心とした当時の資料群に依拠しながら、「驕慢の罰」という詩篇を、つい先ごろ詩人が体験したばかりの騒擾に関する「暗号化された注釈」<sup>32</sup>と規定する。ここから、詩の冒頭の「神学華やげる頃」は2月の沸き立った興奮を、神学者はユートピアを説く理論家たちを、「純粹なる聖霊たちのみが来たことのある、／天なる栄光へと向かう尋常ならざる道」というのは、第二共和政初期の夢想や熱望を表象するものとして解説<sup>デコード</sup>される。ここで注目すべき点は、「現下の状況」において、プルードンが肯定的な仕方で登場していることである。六月暴動を論じる件において、次のような一節が見出される。

否。勇を鼓して、事実をあるがままに認めなければならない。プルードンがただ一人、そして最初に言った。暴動は社会主義的なものであると。彼は嘘をつかない、この男は。彼は率直で明快だ。<sup>33</sup>

この一節は、この時期のボードレールのプルードンへの傾倒と労働者たちの置かれた状況に対する理解の深さを示すものである。「暴動は社会主義的なものである」という表現は、民衆蜂起の根本的な原因が、政治結社や議会に関わる党派の運動といった政治的な力学によるものではなく、民衆の置かれていた苦境そのものから生じたものであることをプルードンとボードレールがよく見抜いていたことを物語っている。したがって、「驕慢の罰」の神学者の逸話が、プルードンを非難するために持ち出されたと想定するのは困難であるということになる。では、この神学者の寓意は何を物語っているのであろうか。

ジャン＝ポール・アヴィスによれば、詩の冒頭の「〈神学〉華やかなりし頃」とは、神学が「論理＝言葉」<sup>ロゴス</sup>の力によって、異教の信仰と神の知恵との断絶を解消し、「〈受肉した〉神の言葉」<sup>ヴェルブ</sup>(＝キリスト)が人間性と聖性との統一となる約束を果たし得ていた時代のことであるという<sup>34</sup>。そして、「タイヤンディエ論文」に言及するのだが、アヴィスが注目するのはフランス社会主義ではなく、ドイツ無神論の方なのである。アヴィスはここで、タイヤンディエ

31 当時の共産主義の代表作である『イカリア紀行』を著したカベ (Étienne Cabet) のこと。すなわち、「イカリア人」とは、端的に共産主義者を指す。

32 R. Burton, *Baudelaire and the second republic*, p. 285.

33 « Non ; il faut avoir le courage d'avouer les faits tels qu'ils sont. Proudhon l'a dit, le seul et le premier ; *L'insurrection est socialiste*. Il ne ment pas, celui-là ; il est brutal et clair. », *OC II*, p. 1062.

34 J.-P. Avicé, « La Théologie usée de Baudelaire », p. 82-83.

論考にも引用されていた新ヘーゲル派の公式、「人間ハ人間ニトツテ神ナリ」、あるいは「人間ハオノズカラ神ナリ」(« *Homo homini Deus* » ou « *homo sibi Deus* ») を取り上げ、キリスト教的な神、そして神学がもはや「使い古されたもの」となってしまった19世紀の思想状況に、ボードレールの詩篇を結びつける<sup>35</sup>。

アヴィスによるこの解釈は、きわめて重要である。なぜなら、「驕慢の罰」において、「神学華やかなりし時代」が「人間性と聖性との統一」を果たしていた時代を指し、神学者が「瓦解した神学の教説」の比喩として理解されるとすれば、もはや(例えば中世のような)理想化された過去に遡る必要はなくなるからである。すなわち、詩篇「驕慢の罰」の時代と神学者は、七月王政期の1830年代から40年代にかけて、特にゴーチエからボードレール世代の若い文学者たちの間で横溢していたキリスト教的社会主義の思想の寓意として解釈することが可能となるのである。

こうしたロマン主義的異端思想の1人として、アルフォンス・ルイ・コンスタンを挙げることができ<sup>36</sup>。1840年代半ばにボードレールと交流があり、また名高い「万物照応」の詩篇に影響を与えたとされるこの人物は、主著『神の母』を初めとする著作群において、聖書の再解釈やマリア信仰を中心とした三位一体の読み替えなどを通して、キリスト教的社会主義の潮流の中で看過し得ぬ位置を占めていた。1846年に刊行された『最後の受肉』では、19世紀の社会的危機を救うために、子供として現世に再び降臨したイエスが、貧しい母親、労働者、資本家、神学者など、様々な人々の間を巡り、新たな福音を伝えていくのであるが、ボードレールの詩篇との関連において無視し得ぬ点は、ほぼ全ての章にわたって、「驕慢」(*orgueil*)の語が用いられていることである。すなわち、再臨したイエスが目の当たりにする迷える人々について、彼らの躓きの原因がその驕慢にあるとされているのであり、ほとんど一書の主題となっているかのようにさえ思われる。そして、この現代に蘇ったイエスの物語において、最後の対話相手がサタンとなっているのは示唆的である。というのも、ボードレールの詩篇には「サタンのような驕慢 (*orgueil satanique*)」という表現が見出され、コンスタンの著作ではまさしくサタンの驕慢が語られるからである。第18話「カルヴァリオでの別れ」の冒頭において、サタンはゴルゴタの丘で〈人=神〉、すなわちイエスの死を夢想している。そこに姿を現したイエスに対して、サタンは抑圧者としての神に対する冒瀆の言葉を吐く。

悪しき者とは、みな精神に対して知性を渴望させながら、真実を不可知な神秘のうちに包んでしまう者のことだ。

<sup>35</sup> J.-P. Avicé, « La Théologie usée de Baudelaire », p. 83-84.

<sup>36</sup> 後にエリファス・レヴィ (Éliphas Lévy) の名で知られるようになる。コンスタンについては、以下の書目を参照。Paul Bénichou, *Le Temps des prophètes* [1977], *Romantismes français I*, Gallimard, 2004 [surtout p. 856-867] ; Claude Pichois, *Baudelaire, Étude et témoignages*, Neuchâtel, Baconnière, 1967 ; 澁澤龍彦、『悪魔のいる文学史』、中公文庫、1982年；横張誠、『ボードレール語録』、岩波現代文庫、2013年、p. 377-378.

それは、彼らの愛に理想的な処女、熱狂のうちに彼らを投げ入れるような陶然たる美を垣間見させておきながら、それを与えるが早いかな、その美を最初に抱擁した途端にこれを奪い取り、この美に永遠の鎖を負わせる者のことだ。最後に、悪しき者とは、天使たちに自由を与え、彼の奴隷となることを望まぬであろう人間たちに無限の責め苦を与える者のことだ！<sup>37</sup>

こうして、神を「悪しき者」として非難するサタンに対して、イエスは、「真実を隠そうとする影や神秘は神によるものではなく、サタン自身の精神の弱さに由来するものである」として、次のように説く。

神は奴隷を欲しているわけではない。反逆的な驕慢こそが、隷属を生み出したのだ。神の法、それは彼の被造物に関わる完全なる法律であるが、それは彼らが持つ永遠の自由に付けられた名義である。<sup>38</sup>

イエスはサタンに対して、自分と共に知性と愛によって世界を統べることを提案する。もしもこれを受け入れるなら、サタンの名をルシファーと改め、労働と産業の精霊 (génie) とし、サタンは世界を飛び回り、神の栄光を呼び覚ます者となるだろうと言う。

汝は孤立から来る驕慢となる代わりに、献身による崇高な驕慢となるであろう。そうして、私は汝に地上の王笏と天上の鍵を与えよう。<sup>39</sup>

だが、サタンは自らの心臓に嘔みついたままの蛇を指し、自分でははや愛することができないとしてイエスの申し出を拒絶する。この蛇は、サタンの心に巣食う妬みの心の象徴である。そこで、イエスはマリアを呼び寄せ、その傷を癒すように促す。マリアがサタンの傷口に触れると、蛇は地面に落ちる。マリアは蛇の頭を踏みつけてこれを殺す。こうして、再生した天使

<sup>37</sup> « Le méchant c'est celui qui donne aux esprits la soif de l'intelligence, et qui enveloppe la vérité dans un impénétrable mystère./ C'est celui qui laisse entrevoir à leur amour une vierge idéale, une beauté enivrante à les jeter dans le délire, et qui la leur donne pour l'arracher aussitôt à leurs premiers embrassements et la charger de chaînes éternelles. C'est celui qui enfin qui a donné la liberté aux anges, et qui a préparé des supplices infinis pour ceux qui ne voudraient pas être ses esclaves ! », Alphonse Constant, *La Dernière Incarnation. Légendes évangéliques du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, La Librairie sociétaire, p. 110-111.

<sup>38</sup> « Dieu ne veut pas d'esclaves : c'est l'orgueil révolté qui a créé la servitude. La loi de Dieu, c'est le droit royal de ses créatures ; ce sont les titres de leur liberté éternelle. », A. Constant, *La Dernière Incarnation*, p. 111.

<sup>39</sup> « Au lieu d'être l'orgueil de l'isolement, tu seras l'orgueil sublime du dévouement, et je te donnerai le sceptre de la terre et la clef du ciel. », A. Constant, *La Dernière Incarnation*, p. 112.

であるルシファーは涙を流すのだが、この涙が彼の瀆神の罪を洗い流す。このとき、カルヴァリオの丘が震動したかと思うと、その荒れ果てた地に緑が芽吹き、新鮮な輝きを取り戻す。もはや死の苦しみをかこつことのないイエスは、自分と同じくマリアは苦悩から、そしてルシファーは罪から解放されたことを告げ、二人の手を取る。

もはや私たちは同じ一つの聖霊である。すなわち、知性と愛の聖霊、自由と勇気の聖霊、死に打ち勝った生命の聖霊である。<sup>40</sup>

一体となった三者は友愛に満ちた地上を見下ろしながら、天上へと昇っていく。もはやイエスが死の苦しみに懊悩することはない。同様に、マリアは苦悩から、かつて悪魔であった自由の天使は罪から解き放たれた。これがコンスタンの説く新たな贖罪の成就である。

コンスタンによって展開される物語は一見かなり奇異なものに見えるが、キリスト教の伝統的な教義や概念を借用しつつ、それらを同時代の政治的・社会的な問題意識にしたがって再解釈することは、1830年代から40年代に文学テキストや政治文書に横溢していたキリスト教的社会主義、あるいは人道主義的ロマン主義の教条体系に見られる典型的な思考原理である。ここで概観した第18話を見るだけでも、三位一体の教義はもとより、イエス、マリア、サタンの位置づけ、贖罪の観念も根本的な変容を被っていることがわかる。

ここで改めてボードレールの詩篇に戻れば、「驕慢の罰」は、聖霊、驕慢、鍵、神殿、知性とといった語彙がコンスタンの著作と共通で用いられていることに気づかされる。これらの語は、神学的な著作で頻繁に用いられるものであると同時に、当時のキリスト教的社会主義において頻繁に見られた語群である。したがって、この詩篇を書いた際に、ボードレールが念頭に置いていたのがアルフォンス・コンスタンであったかどうかについては議論の余地があるものの、様々な点から、これを一つの典型とする1830年代から40年代のユートピア思想を踏まえて書かれたものと考えられるべきであろう。そして、コンスタンの詩や思想は、ボードレールが当時最も親しんだものの1つである以上、ボードレールの詩篇に何らかの影響を与えた可能性は高い。このとき、激しい驕慢に襲われた神学者を、まさしくコンスタンに見られるような異端思想の象徴として理解することが可能になる。そうだとすると、神学者が見出した論理的解決について、「純粹な聖霊のみの通い来た、[...] 自らも知らぬ尋常ならざる道」という表現と、その後の神学者の辿った顛末には、ユートピア思想に対する苛烈な批判が込められていると考えることができる。

<sup>40</sup> « Nous ne sommes plus qu'un même esprit : l'esprit d'intelligence et d'amour, l'esprit de liberté et de courage, l'esprit de vie qui a triomphé de la mort. », A. Constant, *La Dernière Incarnation*, p. 113.

### 3. 相反する詩としての『家庭画報』2篇

ここで、「驕慢の罰」が発表された際、これと併せて発表されたのが「まじめな人々の葡萄酒」であったことは看過し得ない事実である。というのも、この詩篇は社会主義の影響が明らかに認められる作品であり、したがって、1850年の『家庭画報』2篇は共に、1840年代の社会主義思想との関連を持つ詩篇だということになるからである。

問題は、両詩篇において、ユートピア思想の意義が全く逆のものとして把握されていることである。「驕慢の罰」において、ユートピア思想が批判的に扱われていることは既に見た。これに対して、「まじめな人々の葡萄酒」では、葡萄酒という主題を軸として、むしろ人道主義的社会主義の思想が肯定的に展開されているのである。この詩篇は、ある夜、葡萄酒が「光と友愛に溢れた歌」を歌い出すことで始まる。この歌の中で、葡萄酒は一日の仕事で疲れ果てた労働者を癒し、その妻と息子にも生気を取り戻させる霊薬として描かれる。これまで幾度も指摘されてきたように<sup>41</sup>、この詩篇全体が社会主義的な思想に基づいて書かれているのだが、特に最後の詩節ではその傾向が顕著に見られる。

植物性の霊薬たる私はお前の中へ落ちてゆく  
 豊饒の穀粒が畝溝へと落ちてゆくように。  
 そして私たちの結びつきからは詩が生まれ、  
 一匹の大きな蝶さながらに神の許へ昇るだろう！<sup>42</sup>

2行目で用いられている表現について、ピショワは「キリスト教的社会主義のイメージ群」に属するものであると指摘しているが、「結びつき」(union)という語もまた、労働者たちの連帯といった文脈においてしばしば用いられていたものである。さらに、ボードレルが1851年の3月に発表した「葡萄酒とハシッシュについて」<sup>43</sup>では、薬物によって引き起こされる陶酔の分析を通じて、陶酔の詩学とでも言うべき理論が提示されているのだが、第二共和政期におけるボードレルの代表的な詩学理論であるこの記事には、次のような一節が見出される。

<sup>41</sup> 「まじめな人々の葡萄酒」(「葡萄酒の魂」)については、以下の研究を参照。Luc Badesco, « Baudelaire et la revue *Jean Raisin* », *Revue des Sciences humaines*, janv.-mars, 1957, p. 57-88 ; Graham Robb, *La poésie de Baudelaire et la poésie française 1838-1852*, Aubier, 1993 ; 横張誠、『ボードレル語録』、岩波現代文庫、2012年。

<sup>42</sup> « En toi je tomberai, végétal ambrosie, / Comme le grain fécond tombe dans le sillon. / Et de notre union naîtra la poésie / Qui montera vers Dieu comme un grand papillon ! », *OC I*, p. 1046.

<sup>43</sup> この記事は、保守派のブルジョワを中心とした反ボナパルティスムの新聞『議会通信』に、1851年3月7、8、11、12日と4度に分けて発表された。「Du vin et du hachisch, comparés comme moyens de multiplication de l'individualité », *OC I*, p. 377-398.

彼は説明するであろう、いかにして、そしてなぜ、ある種の飲み物は思惟する存在の人格を度外れに増大させる能力を、そして、そこでは自然状態の人間と葡萄酒、すなわち動物の神と植物の神とが、〈三位一体〉における〈父〉と〈子〉の役割を演じるようにして、いわば神秘的な操作として三人称を創造する能力を含むのかということ。両者が相俟って一個の〈聖霊〉を生み出すのであるが、これは、同じく両者から発出するところの上位人にほかならない。<sup>44</sup>

この奇妙な理論と先ほど引用した「まじめな人々の葡萄酒」の最終節とを読み合わせると、ここで言われている「〈聖霊〉」とは、「詩」(poésie)を指すものと考えることができる。つまり、ボードレールは人間、葡萄酒、詩を位格とする新たな三位一体の枠組みを提示しているのである。ボードレールがどこまで本気であったかはともかく、こうした発想の枠組それ自身がロマン主義的異端思想の特徴であったことを思えば、ボードレールの陶醉の詩学もまた、その影響下で構想されたことになる。

だが、こうしたユートピア思想こそ、「驕慢の罰」で批判の対象となっていたものではなかったか。また、『家庭画報』2篇を通覧するだけでも、「まじめな人々の葡萄酒」の結末において、人間と葡萄酒の結びつきから生まれた詩が「神の許へ昇る」とは、それこそが慢心であり、罰を受けるべき考え方ではないであろうかといった疑問が浮かぶ。もちろん、ボードレールがこうした両詩篇の齟齬に気づいていなかったはずはない。そこで、「驕慢の罰」と「まじめな人々の葡萄酒」の組み合わせが意図的なものであったとすれば、キリスト教的社会主義という思想的背景の共通性以上に、何らかの理由があったのだと考えざるを得ない。それは何か。

この問いについての示唆を与えてくれるのが、「ハシッシュと葡萄酒について」である。ボードレールはここで、2つの人工的手段であるハシッシュと葡萄酒のもたらす陶醉について分析し、両者の共通点は、「人間に極度の詩的発展」を遂げさせることであると論じる。だが、これらの薬物に対するボードレールの評価は全く異なっている。

葡萄酒は意志を昂揚させるが、ハシッシュは自殺のための武器である。葡萄酒は人を善良で社交的にする。ハシッシュは人を孤独にする。一方は言ってみれば勤勉であり、他方は本質的に怠惰である。実際、天国を一举に奪い取ることができるとすれば、何事であれ、働いたり、耕したり、書いたり、作ったりすることが何になるだろう。要するに葡萄酒は、労働し、これを飲むのに相応しい民衆のためのものだ。ハシッシュは孤独な喜びを享

<sup>44</sup> « Il expliquera comment et pourquoi certaines boissons contiennent la faculté d'augmenter outre mesure la personnalité de l'être pensant, et de créer, pour ainsi dire, une troisième personne, opération mystique, où l'homme naturel et le vin, le dieu animal et le dieu végétal, jouent le rôle du Père et du Fils dans la Trinité ; ils engendrent un Saint-Esprit, qui est l'homme supérieur, lequel procède également des deux », OC I, p. 387.

受する階級に属している。それは惨めな暇人のためのものだ。葡萄酒は有用であり、実り豊かな結果をもたらす。ハシッシュは無用で危険だ。<sup>45</sup>

葡萄酒は労働者階級のものであり、有用であるという主張が「まじめな人々の葡萄酒」の内容と一致することが確認できる。ここで注目したいのは、「天国を一挙に奪い取ることができる」という文言である。これがハシッシュを批判する根拠となっているようであるが、この点において、ハシッシュに対する否定的判断が労働の価値の称揚と表裏一体のものであることが明らかとなる。そして、これと同じ考え方が第二共和政期の政治的テキストにも見出されるのである。1848年10月の『アンドル県の代表者』の記事「現下の状況」の第二共和政府を批判する件には次のような一節がある。

我々の風俗習慣に無いもの、それは新しく、また理解されないような権利を布告する暴力である。あらゆる人間的な事柄——諸観念、諸権利、諸制度——は、ゆっくりとしか、またあらゆる開花、実り、収穫にも似た逐次的な進歩によってしか創出されるものではない。<sup>46</sup>

こうした人間の基本原則を破ろうとするならば、恐るべき結末をもたらすことになる。これをハシッシュに対する否定的見解と重ね合わせてみるならば、ハシッシュや暴力的な政治的決定は、「天国を一挙に」奪取しようとする非人間的な行いであるが故に断罪されていることがわかる。これに対して労働は、絶え間ない日々の苦心によって、社会の漸進的進歩に貢献するものである。こうした観点から見ると、同じ「現下の状況」の記事中で、ユートピア思想家たちが民衆を騙すのに用いたとされる「万能薬」のイメージが、ハシッシュのそれと結びつくようにも思われる。両者は、現実には不可能な理想を、ただちに実現させるように見せるといって同罪である。この漸進的な社会進歩という考え方に着目するならば、ボードレールはずいぶん現実的な物の見方をしているようにも思われる。ボードレールをこうした物の見方へと導いたのは、1848年の諸事件であったと考えることは決して無理な推論ではあるまい。具体的な例を挙げてみれば、六月暴動へと繋がる国立作業場設置の布告などはそのような事例で

<sup>45</sup> « Le vin exalte la volonté, le hachisch est une arme pour le suicide. Le vin rend bon et sociable. Le hachisch est isolant. L'un est laborieux pour ainsi dire, l'autre essentiellement paresseux. À quoi bon, en effet, travailler, labourer, écrire, fabriquer quoi que ce soit, quand on peut emporter le paradis d'un seul coup ? Enfin le vin est pour le peuple qui travaille et qui mérite d'en boire. Le hachisch appartient à la classe des joies solitaires ; il est fait pour les misérables oisifs. Le vin est utile, il produit des résultats fructueux. Le hachisch est inutile et dangereux. », *OC I*, p. 397.

<sup>46</sup> « Ce qui n'est pas dans nos mœurs, c'est la violence décrétant des droits nouveaux et incompris. Toutes choses humaines — idées, droits, institutions — ne se gênent que lentement et que par un progrès successif et analogue à toutes les floraisons, moissons et récoltes. », *OC II*, p. 1063.



はなかったであろうか。職のない労働者に仕事を与えるという大義名分は一見したところ立派なものであるが、それが血の惨劇を生むきっかけになったということは、事後的に見れば、明らかに暴力的な布告であった。一挙に理想を実現することは不可能であるにもかかわらず、それが可能であるかのように見せかけ、民衆を欺いた煽動者たちが非難されるべきは当然と言える。

第二共和政期のボードレール詩学の特徴は、まさしくこうした社会的、道徳的な問題と密接な関連を有している点にある。それを示すのが、1848年頃にボードレールがプルードンの著作から書き抜いたとされる一節である。

芸術、すなわち、自らの人格、自らの妻、子供たち、自らの観念、言説、行動、生産物における美の探究、真実の完璧化。かくのごときが、労働者の最後の発展段階、〈自然〉の〈円環〉を輝かしく閉じるべく定められた位相である。〈美学〉、そして美学の上方の、〈道徳〉、これこそが経済〈体系〉の要石である。

P. J. プルードン<sup>47</sup>

この一節を含む『貧困の哲学』の最終章「人口」では、労働をめぐるプルードンの思想が展開される。実際、この一節の直後では、「人間が作り為すもの全て、彼が愛するもの、憎むものの全て、彼を悲しませるもの、関わるものの全てが、彼にとっては芸術の素材となる」<sup>48</sup>とされ、また「人間とは加工する動物である」との定義に基づいて、芸術の生み出される人類学的かつ政治経済学的なプロセスが理論的に再構築されている。第二共和政期のボードレールがプルードンの『貧困の哲学』に惹かれたとすれば、それはまさしく、労働、政治経済、道徳、芸術に関わる諸問題を、ひと繋がりの問題として体系的に把握し得るパースペクティヴのみならず、現実的な解決策をも提示し得るアクチュアルな理論たり得た、少なくとも当時のボードレールにはそう見えたからではないであろうか。ボードレールだけでなく、写実主義画家クールベもまたこの時期にプルードン主義へと傾斜していったのだが、それはプルードン哲学が労働と芸術を理論的に結びつけることができるものであったと同時に、1848年後の状況におい

<sup>47</sup> « L'art, c'est-à-dire la recherche du beau, la perfection du vrai, dans sa personne, dans sa femme et ses enfants, dans ses idées, ses discours, ses actions, ses produits : telle est la dernière évolution du travailleur, la phase destinée à fermer glorieusement le Cercle de la Nature. L'Esthétique<sup>a</sup>, et au-dessus de l'esthétique, la Morale<sup>b</sup>, voilà la clé de voûte de l'Édifice<sup>c</sup> économique. », OC II, p. 979 ; P.-J. Proudhon, *Système des contradictions économiques*, t. II, p. 481. ここに引用したテキストはボードレールの抜書きに拠るものであり、プルードン自身のテキストとは若干ながら異同が認められるため、その部分に a から c の符合を付した。これらの箇所についてはプルードンのオリジナルでは以下の表記になっている。a : *Esthétique*, b : *Morale*, c : *édifice*.

<sup>48</sup> « Tout ce que fait l'homme, tout ce qu'il aime et qu'il hait, tout ce qui l'affecte et l'intéresse, devient pour lui matière d'art. », P.-J. Proudhon, *Système des contradictions économiques*, p. 481.

でも現実性を失うことが無かったからであろうと考えることができる<sup>49</sup>。

労働と芸術の問題が、この時期に改めて切迫した問題として意識化されていたことは、「まじめな人々の葡萄酒」における表現の異版を比較して確認することができる。エルネスト・ブラロンの証言によって、この詩篇は1840年代前半には作られたと見られているが、注目すべきは友人テオドル・ド・バンヴィルの詩集『鍾乳石』(1846)での異文である。ここに収められた「葡萄酒の歌」というバンヴィルの詩篇の題辞には、ボードレールの詩篇の第1行目が下記のように引かれている。

ある晩、葡萄酒の魂は酒瓶の中でこう歌っていた……<sup>50</sup>

この詩行は、1850年の『家庭画報』および1851年の『民衆の共和国』に掲載されたときには、次のようになっていた。

晩になると、葡萄酒の魂は酒瓶の中でこう歌う……<sup>51</sup>

きわめて興味深いことに、1846年にバンヴィルが引用した段階で、この詩句は『悪の花』版(1857年以後)と同じ表現をとっていた。つまり、第二共和政期に「ある晩」(un soir)の代わりに「晩になると」(le soir)、「歌っていた」(chantait)の代わりに「歌う」(chante)という日常的な反復性を強調する表現に書き換えられたにも拘わらず、その後、再び「葡萄酒の歌」の一回性を示す表現へ戻されたと言うことである。言い換えれば、後に詩集で「葡萄酒の魂」と名づけられるこの詩篇について、ボードレールは第二共和政の時期にとりわけ強く「<sup>アクチュアル</sup>現在の」意味を担わせていたということである。だが1848年以降、ユートピア思想の現実的な瓦解を目の前にしてきた詩人が、キリスト教的社会主義の可能性を盲目的に信じていたわけでないことは、詩篇「驕慢の罰」の内容とブルードン思想への傾斜とがはっきりと示しているとおりである。おそらく、ボードレールは1848年後に生じた、新しい政治的状况と思想的文脈の中で、改めて詩と民衆あるいは労働との関係性を問い直す必要に迫られたのである。

49 クールベとブルードンの関連については資料が多数に上るため、ボードレールとの関連も考慮したうえで特に重要と思われる3つの書目を以下に掲げる。Timothy James Clark, *Une image du peuple, Gustave Courbet et la Révolution de 1848*, traduit de l'anglais par Anne-Marie Bony, [Londre, Thames and Hudson Ltd, 1973, 1982], art édition, 1991; James Henry Rubin, *Realisme et vision sociale chez Courbet et Proudhon*, traduit de l'anglais [Princeton University Press, 1980] par Pierre-Emmanuel Dauzat, Paris, Éditions du Regard, Paris, 1999; Michèle Haddad, « Du silence au verbe. La politique de Courbet en trois temps », *Courbet/Proudhon, l'art et le peuple*, Sekoya, 2010, p. 63-70.

50 « Un soir, l'âme du vin chantait dans la bouteille », *OC I*, p. 105; Théodore de Banville, *Les Stalactites*, Paris, Paulier, 1846, p. 83 [signé de Baudelaire Dufaÿs].

51 « Le soir, l'âme du vin chante dans la bouteille », *OC I*, p. 1049.

1850年の段階で全く新しい詩であった「驕慢の罰」と、1840年代半ばの若書きの詩が併せて発表され、しかも古い詩篇よりも新しい詩篇が先に載せられているということは、新たな理論的枠組みの所在を示したうえで、その枠内において、詩と労働およびこれらの象徴としての葡萄酒の問題の刷新を図ろうとしたのだと考えられる。

#### 4. 懲罰の詩学

第二共和政期のボードレールは、様々な問題を考えるうえで「懲罰」を基本原則の1つとして考えていたように思われる。実際、1848年から1852年までに発表されたテキストの大部分で「懲罰」(châtiment もしくは punishment) という語が用いられているのが確認される。この観念をボードレールの脳裏に生じさせたのは二月革命であるかもしれない<sup>52</sup>。だが、この詩学が十分に展開されるのは、詩篇「驕慢の罰」と、それに続く文学論においてである。実際、これらのテキストで展開される懲罰に関する考察には、「驕慢の罰」の神学者の運命を想起させるものがある。「葡萄酒とハシッシュについて」には、次のような一節がある。

実際、自らの実存の本源的条件を乱したり、自らの諸能力と環境との平衡を破ったりすることは人間には禁じられており、さもなくば、頽廢あるいは知性の死という刑罰に処されることになる。<sup>53</sup>

これはハシッシュの反社会性を批判する件であるが、同様の指摘が薬物使用以外にも当てはまることは言うまでもない。いや、むしろボードレールはハシッシュについての考察を通して、いかなる条件において芸術が非難されるものとなるか、あるいはすぐれたものとなるかという問題を掘り下げようとしているのである。この観点からするならば、ボードレールは第二共和政期に発表した文芸批評において、「葡萄酒とハシッシュ」で、体系的であるとは言えないまでも、理論の概要を提示し、「道義派の演劇と小説」(以下「道義派」)や「異教派」ではその具体的な批評を試みたのだと考えることも可能であろう。

「道義派」では、道徳的で貞潔な生活を送るブルジョワの夫婦を描いたエミール・オージェ

<sup>52</sup> 『公共福祉』紙の第2号で、ボードレールが書いたとされる記事の一つは「神の懲罰」と題されている。ラムネーの『信徒の言葉』の文体を模倣したとされるこのテキストでは、フランス最後の王となったルイ＝フィリップが平穏を求めて諸国を蜿蜒とさまよひ歩く姿が描かれる。「彼が全力で駆けるのは、〈共和国〉に先んじて何処かへ辿り着き、そこで自らの頭を休めるためだ、それが彼の夢なのだ。[...]」だが、彼が城門に触れるや否や、数々の鐘の音が喜びに揺れ始め、半狂乱の彼の耳に〈共和国〉の到来を告げる！[...] 彼はさらに長きにわたって歩くだろう、それこそが彼の懲罰だ。」(OC II, p. 1035)

<sup>53</sup> « En effet, il est défendu à l'homme, sous peine de déchéance et de mort intellectuelle, de déranger les conditions primordiales de son existence, et de rompre l'équilibre de ses facultés avec les milieux. », OC I, p. 396.

の戯曲『毒人参』について、悪徳など初めから存在しないかのように振る舞うその偽善性を指弾する。

オージェ氏は単に間違えただけのことなのだが、彼の罰はその誤りに含まれているのだ。自分では美德の言葉を話しているつもりで、彼は勘定台の言葉、世間の人々の言葉を話してしまったのだ。<sup>54</sup>

ボードレールが道義派、あるいは良識派と呼ぶ人々は、美德の意義を強調するあまり、社会的現実や人間の心情などを歪めて表現することになる。そして、作品は説教壇と化す。だからこそ、ボードレールはこの流派に属する人々について、「彼らは美德を殺害する」<sup>55</sup>と主張する。そこには、彼ら自身無自覚のままに引き受ける罰が含まれている。

これとは逆に、美をその形式的側面においてのみ愛好し、その精神的な次元を忘れ去ることもまた別の過ちであり、「異教派」ではこの問題が取り上げられる。

造形という、このおぞましい言葉を聞くと私は鳥肌が立つのだが、造形が彼を中毒にしたのであり、とはいえ彼はこの毒でしか生きられないのだ。彼は自らの心情から理性を追い出してしまったので、正当な罰によって、理性は彼のうちに戻ってくることを拒絶する。<sup>56</sup>

この中で「彼」と呼ばれているのは、芸術の造形的な美に心を奪われ<sup>57</sup>、真理、道徳、あるいは有用性といった他の価値基準を忘れ去るか、あるいは歪めてしまう芸術家のことを指している。また、「異教派」の末尾に見られる、芸術を物質主義へと還元してしまう態度を批判する一節は、「驕慢の罰」やハシッシュ批判を容易に思い起こさせるだけでなく、この時期のボードレールの言説に一貫性があることを示してくれるものであるように思われる。

芸術への熱狂は、精神の濫用にも等しい。これら二つの支配権のうちの一つでも成り立ってしまえば、愚劣さ、心情の酷薄さ、計り知れぬほどの驕慢と利己主義が生じることになる。<sup>58</sup>

<sup>54</sup> « Seulement, M. Augier s'est trompé, et son erreur contient sa punition. Il a parlé le langage du comptoir, le langage des gens du monde, croyant parler celui de la vertu. », *OC II*, p. 39.

<sup>55</sup> « Ils assassinent la vertu », *OC II*, p. 43.

<sup>56</sup> « La plastique, cet affreux mot me donne la chair de poule, la plastique l'a empoisonné, et cependant il ne peut vivre que par ce poison. Il a banni la raison de son cœur, et, par un juste châtement, la raison refuse de rentrer en lui. », *OC II*, p. 48.

<sup>57</sup> 「詩的精神が過剰に興奮させられる子供」(« Tout enfant dont l'esprit poétique sera surexcité », *OC II*, p. 48) とも呼ばれる。

<sup>58</sup> « La folie de l'art est égale à l'abus de l'esprit. La création d'une de ces deux suprématies engendre la

こうして第二共和政期のテキストを辿り直してみると、「驕慢の罰」の批判的射程が二月革命以前のユートピア思想のみに留まるものではなく、革命によって成立した第二共和政政府や、革命後になお残存していた、あるいは新たに生まれた様々な文学的・思想的立場にまで及ぶものであることがわかる。翻って見るならば、『家庭画報』に掲載された2篇は、ボードレール独自の詩学と、これを支える新たなモラルを提示するべく選ばれた詩篇であったと考えることができる。ところで、なぜこうした新しい詩学の構築が必要だったのか。ボードレールらの友人でもあった哲学者ジャン・ヴァロンは、二月革命後に刊行された新聞をまとめた批評的著作『1848年の刊行物』の中で、バンヴィル、シャンフルーリ、ボードレールといった文学者たちについて「ここ数ヶ月というもの、社会主義が芸術の絶対的な否認であることも理解せず、誰も彼もが正気を失って、もはや文学を信じず、社会主義に身を投じているように思われる」<sup>59</sup>と論じる。この一連の流れの中で、当時構想中であったボードレールの詩集『冥府』について次のように述べている。

『冥府』、来たる〔1849年〕2月24日にパリとライプツィヒで刊行予定。これはおそらく社会主義的な詩集であり、したがってまづい詩集であるだろう。また一人、プルードンの弟子になってしまったのだ、余りにも無知であったか、あるいは余りにもそうでなかったが故に。<sup>60</sup>

ヴァロンは社会主義を毛嫌いしていたし、この批評が書かれた時点でボードレールはまだ詩篇を発表していないなど、これらの点は差し引かねばならないとしても、彼の同時代人たちに対する注解には一考を払う価値がある。実際、ボードレールが革命後に政治的ジャーナリズムの言説に深く入り込んだこと、またブランキヤプルードンに接近したことは事実であり、何らかの点で「正気を失った」文学者の1人に見えたとしても不思議ではない。ただ、そうした動向それ自体が、歴史的事件に伴う混迷や動揺を乗り越えようとする思想的あるいは詩学的な模索の過程であり、そこに胚胎していた創造的な側面を見抜くことができなかった点に、ヴァロンの洞察の限界もあったと言える。『家庭画報』の2篇は、1848年に続く社会的混乱に伴って生じた「現代青年の動揺と憂鬱」を詩的創造の契機とすることで、詩人自身が青年期に依拠し

sottise, la dureté du cœur et une immensité d'orgueil et d'égoïsme. », OC II, p. 49.

<sup>59</sup> « Tous, depuis quelques mois, semblent avoir perdu la tête, ne plus croire à la littérature et se jeter dans le socialisme, sans voir que le socialisme est la négation absolue de l'art. Tout ceci n'est-il pas bien triste ? Que pouvons-nous attendre de l'avenir ? », Jean Wallon, *La Presse de 1848 ou Revue critique des journaux publiés à Paris depuis la Révolution de février jusqu'à la fin de décembre*, chez Pillet fils ainé, Paris, 1849, p. 114.

<sup>60</sup> « *les Limbes*, pour paraître le 24 février à Paris et à Leipsick. Ce sont sans doute des vers socialistes et par conséquent de mauvais vers. Encore un devenu disciple de Proudhon par *trop* ou *trop peu* d'ignorance. », J. Wallon, *La Presse de 1848*, 1849, p. 114.

ていたロマン主義文学や社会思想を乗り越えるべく構想された2部構成のテキストであったと考えることができる。

キーワード：驕慢、懲罰、ユートピア、社会主義、プルードン

**Résumé**

Baudelaire et le socialisme après la révolution de février :  
« Châtiment de l'orgueil » contre les idéologies

Minoru Sasaki

C'est dans le numéro de juin 1850 de *Le Magasin des familles*, revue de foyer, que pour la première fois après la révolution de février, Baudelaire publie deux poèmes tirés de *Les Limbes*, recueil en projet. Le premier de ces poèmes intitulé « Châtiment de l'orgueil », raconte une anecdote où un théologien, enivré de sa dialectique, perd sa raison en punition de son orgueil. Certes, l'histoire a pour source un récit allégorique du Moyen-Âge, mais le poème est directement inspiré d'un article philosophique qui accuse le socialisme de Proudhon de la révolution. Malgré cela, il est peu probable que ce soit un reproche adressé à la pensée de Proudhon. On est ainsi amené à supposer que Baudelaire blâme les utopistes des années 1830 et 1840. Mais les pièces publiées en diptyque sont contradictoires car le second poème, « Le vin des honnêtes gens », est justement inspiré des pensées utopistes. En parcourant les critiques littéraires de Baudelaire sous la Seconde République, on voit qu'en se référant à la philosophie proudhonienne, le poète fait l'éloge des ouvriers, en même temps qu'il condamne les démagogues qui conduisent le peuple à la banqueroute. C'est ainsi que « Le vin des honnêtes gens » symbolise la poésie de l'ivresse qui sous-entend l'admiration pour les pauvres travailleurs, tandis que « Châtiment de l'orgueil » présente la perspective circonscrivant les idées politiques de Baudelaire à cette époque. C'est pourquoi ces deux poèmes correspondent parfaitement au sujet de *Les Limbes* qui traduisent « les agitations et les mélancolies de la jeunesse moderne ».

Keywords: orgueil, châtement, utopie, socialisme, Proudhon